

インドと繋がる

西川 至

The link with India

Itaru NISHIKAWA

はじめに

乞われるままに書き記すことは、一私人のインドへのアプローチである。発表誌『民族植物学ノオト』の読者対象として相応しい内容に仕上げることは難しいと思っている。しかし、発行責任者からの依頼なるが故に、今回のご縁に応える努力をしてみたい。

私は1922年7月生まれ、今年94歳を生活している。そして、初めてインドに接触した1993年2月は70歳古稀の年であった。すべてが手遅れのインドであったが、さりとてインドを通り過ぎる一般の旅行者とはかなり異なるその後の20余年があった。それらは全く個人的な思い入れであるが、そのことが木俣美樹男先生との縁を得ることにもなった。私が旅の後、収集したインド関連本（以下、インド本と書く）は小菅村にある「植物と人々の博物館」に安住の場を得ている。以下、90年のインドについて思いつくままに書き残しておきたい。

ものごころつくころ

日本はいま、かつてない長寿社会になったとはいえ、昭和初期のころのことを語り合える人は私の周辺には殆どいなくなってしまった。「昭和 昭和 昭和の子供よ僕たちは…」というフレーズの歌を実感として語る人に出会うことは先ずない。昭和4（1929）年が就学の年で、学校生活の中で少しずつ知識を習得していく過程は、いまも昔も変わりはないとしても、私の子どもころと違って、いまはあらゆる情報が就学前の子どもころの前を飛び交っている。

四国愛媛県の南西部は南予といわれている。その宇和盆地の農村で育った少年にとって、新

しい知識の殆どは学校で教わることであった。いや、それにもう一つのルートとして『少年倶楽部』という雑誌があった。

私が「インド」を初めて意識したのは、小学6年生の地理（外国）の授業によってかと思う。5年生では日本の地理を習い、6年生で世界地理を学ぶ。地理の授業には教科書のほかにサイズの違う「地理付図」というのがあった。それには平野や山脈や海などを区別する地勢図のほか、国別に色分けした世界各地の地図も載っていた。

国別地図は日本を赤く、中華民国（支那とも言った）は黄色に塗られていた。いまは幻の地域となったが、満洲国もオレンジ色で位置づけられていた。世界は7大陸に分かれていたが、そのどこにもピンクに塗られた地域があった。その宗主国がイギリスで、世界各地に領土（植民地）をもっていた。一日中陽の沈むことのない国とも教わった。

アジアの地図を見ると、目の行く先に三角形にとがったピンクの半島があった。それがインドであった。当時は現在のパキスタン、バングラデッシュ、ミャンマー、スリランカも同じ英領だったので、同じ色の広大な地域が広がっていた。「インドはイギリスの植民地で、綿花とかジュートとか鉄鉱石を多く産出する」という概念が、少年のころのかすかな記憶である。

いや、インドはお釈迦さまの生まれた地ということは、学校でインドを学ぶ前に知っていたかも知れない。先に書いた『少年倶楽部』に教科書以外のインドを見たかも知れないが、いま具体的に思い出すことはできない。しかし、子どもの頃の私はインドに何があるか、どのよう

な人が住んでいるかなど、具体的に知ろうともしなかった。

下って、1993年に初めてインドの地を踏み、そこでインドの農村の子どもの姿を見たとき、直感的に連想したのは私の少年時代の暮らしであった。屋外を駆け回っていた70年前の少年時代が、いまここに残っていると直感したのは何故だろうか。

戦いの世代

青年学校の教員を養成する学校に学んでいたころは、すっぱり大東亜(太平洋)戦争と重なる。昭和17(1942)年から20(1945)年にかけてであるが、このころインドをどう見ていたか記憶がない。ただいずれ戦地に行き戦死をするだろう自分のことしか考えられない時代だった。無謀なインパール作戦がビルマに展開されていることなど、知るよしもなかったが、教員養成の学校に在籍していなかったら、彼の地で遺骨として朽ち果てた身であったかも知れない。

チャンドラ・ボースという名前はいつ知ったのだろう。多分、戦後のいつのころかと思う。戦いの時代は、インドはイギリス軍の一員として枢軸軍と戦っていたのだ。チャンドラ・ボースがシンガポールで国民軍を募って、ビルマ戦線を日本軍とともにインド解放のための行動をとったことは、かなり後になって知ったことである。

ふとこの時代に『アニリン』という本を見たことをいま思い出した。アニリンとはドイツの発明した化学染料のことだが、その影響をものに受ける地域としてインドの農村のことが書かれていた。

パール判事の東京国際裁判における日本無罪論は、インドという国を強い印象で意識づけてくれたが、それも後づけの知識だった。

時代が転換して

ものの本によると、イギリスの干渉に抵抗していたインド(ムガル帝国)が、その力に屈してイギリス政府の植民地になったのは明治維新の10年ほど前という。その後、ガンジー等の

不服従運動の成果と、あわせて第二次世界大戦の帰結としての植民地解放の流れの中で、インドが独立を勝ち得たのは1947年。昭和で言えば22年8月のことである。私にとって、その時は新制中学の国語教師として勤め始めたころであったが、それらインド、パキスタンの分離独立のことなど話題となった覚えもない。

時の経過の中でガンジーなきあと、ネルーのリードする第三世界を標榜する非同盟主義のインドを好もしく思う気持ちなどはかなりあった。しかし、私にとって直接インドという国というか地域に関心を強めるには、さらに戦後40年ほどの時間が必要だった。

好んで求めた道ではなかったが、新制中学が出来たことで郷里の中学校で教鞭を取り、昭和28(1953)年の上京以来、多摩地区の小学校に30年勤める結果となった。この期間、出版ブームと相俟って、読むこともなかった数多くの全集・叢書を含めてかなりの書籍を求めたが、初期の2、3冊を除いてインドに関心を持つようになったのは、1985年に刊行された妹尾河童『河童が覗いたインド』との出会いによったかと思う。

初期のころというのは1957年刊行の岩波新書、堀田善衛『インドで考えたこと』と、同じ岩波新書の石田保昭『インドで暮らす』1963年刊であった。いずれも普及度の高い新書版ということと、内容の妥当性からこれらの本は長く版を重ねた。堀田善衛の本は、前年デリーで開かれた第1回アジア作家会議の書記局員として数ヶ月のインド滞在の記録であるが、この当時インドに長期滞在をすることは珍しかった。そして、いままで閉ざされていたインドへの視野を日本人に広げるのに、この本は重要な役割を果たした。石田保昭の『インドで暮らす』は、ニューデリーの日本語学校の教師として1958年から60年までインドで生活して、インドの庶民生活を報告している。

後日70歳でのインド行きのもと、インド本を漁るようになってみると、藤原新也の『インド放浪』1972年刊が出るまで、かなりの人がインドに渡り、それぞれに記録を残していること

がわかった。関心が薄いものには、少部数刊行のこれらの本を手にとる機会がなかったのは自然の理であろう。

当時インドに渡るには、①留学、②新聞社・公的機関・商社などの駐在員、③仏跡巡礼、④インド政府等の招待等に限られており、バックパッカーのような形態で若者がインドに渡るようになったのは、藤原新也以降と見てよいだろう。私にとって空白期の40年間にインドに渡り業績を残した人々の氏名を、その著書を挙げておくのも意義があることではなかろうか。

荒松雄『インドと交わる』他 1952年(渡印年)
 中根千枝『未開の顔・文明の顔』1953年
 中村元『インド紀行』他 1956年
 武藤友治『今日のインド』他 1957年
 上野照夫『インド紀行』1958年
 山崎利男『悠久のインド』他 1959年
 山際素男『不可触民』他 1961年
 辛島昇『インド入門』他 1961年
 小西正捷『多様性のインド』他 1962年
 糸川英夫『第三の道』1965年
 宮坂宥勝『インド仏跡の旅』1967年
 色川大吉『ユーラシア大陸思索行』1971年
 松本栄一『豪華写真集印度』他 1971年
 渡辺建夫『インド青年群像』他 1971年
 伊勢崎賢治『インドスラムレポート』等
 ※ここに抜きだした人の経歴・業績をいちいち挙げるは煩瑣であり、その著作もかなり後年になって刊行されたものが多い。

インドに目覚める

私はいつのころ、インドを自分の目で見たいと思いはじめたか？

妹尾河童の『河童が覗いたインド』を手にして、インドの多様性に目覚めたことは間違いないので、この本の刊行された1985年以降と考えれば、現職を去って自由の時間を得た後のことになる。そして、最初のインド行きは1993年2月だから、河童の本が出てから8年近くたった。

この間、パスポートの世話になったのは、中国ツアーに一度加わった時だけだった。語学を

習得し得なかった私は、一人で海外に出ることなど考えるところでもなかったが、好奇心というのは人並み以上に持っていたかと思うし、そのことは94歳になるいまでも変わりはないようだが。最初の中国行きのカルチャーショックは大きく、その直後から中国関係の本を買い漁ったのは、インド本の収集と同様であった。中国に対する関心はいまも残っているものの、天安門事件のあと急激に熱が冷えてきた。そして、それからの30年間における中国の変容は私の語るところではない。

インドに行くとしても、仮にツアーに参加するにしても一人旅はとて出来ることでない。「誰か一緒にインドに行きませんか！」という呼びかけは機会をみて試みていた。昭和50年代の後半ころ、高度成長の爛熟期を迎える時代と重なるように自分史ブームが徐々に起こってきた。昭和が平成に変わるころ、私たちも「小金井自分史手作り同好会」なる勉強会を始め、20人余がこの会に加わって月2回の例会を開いており、私は編集アドバイザーの真似事などもしていた。その自分史仲間の1人がインド行きに手を挙げてくれたのだった。

インドと出会う日まで

通称「自分史教室」というサークルの一員に私と同年の冬木健幹という彼が居なかったら、私のインド行きは更に遅れていたであろうし、場合によってはインドとの縁が出来なかったかも知れない。よって彼の名をここに記しておきたいが、彼はもうこの世に対応することができなくなってしまった。

さて、パートナーが出来たからといって、「いざインドへ」とはいかない。やはり既成のツアーに便乗という以外にない。ツアーを探して有楽町で開かれた「朝日サンツアーズ」の説明会に初めて参加したものの、同行するだろう人たちの旅馴れた話しぶりに圧倒される有様。ともあれ、この一行に加わってのインド行きの覚悟を決めた途端にトラブルが起こった。それは私の立場でなくインド事情による。当初の出発日は1992年の10月31日かであったと思うが、思わ

ぬ宗教対立がインドに発生し、渡印自粛の勧告が国から出てしまった。

私は聞いたこともない地名だったが、宗教都市アヨーディヤーという地がある。そこにあるイスラムのモスクをヒンドゥ教徒が襲撃する事件がおこり、その騒動はボンベイとかベナレスにも波及する事態となったのでこの措置となった。それはやがて収まったということで、渡航禁止が解かれて晴れてインドに向かったのは、年の明けて2月に入ったところになった。初めてのインド行きは20名の一行となった。

初めてインドの地を踏む

1993年2月4日(木)12時56分成田離陸。珍しいものだから、後々のために移動の全てを記録して残すことを心懸けたが、その後のインド旅もその踏襲となる。21時20分「ベンガル湾を越えてインド大陸に入る。ガンジス河が見える」とメモしている。22時30分ニューデリーのインディラガンジー空港に着くも、このインド時間は午後7時とあった。

帰国して記録したものに、次のような文言がある。

「長年待ち続けたインド入国だった。三島由紀夫のことばによれば、人はそれぞれにインドに行くには定められた時期があるという。私は70歳でこの時期が到来したということになるだろうか。初めてデリー空港からインドの道路に車が走り出し、うす暗いインドの大地を見て、やっとインドへ来たという実感をもった。」

「牛糞かも大地煙れる匂う夜は

まさしく空港印度を踏める」

これは青森からやってきた一人旅の藤川富久さんが寄越してくれた歌。

見る人に煩瑣かも知れないが、往復の日数もいれて10日間で回った地名を記録しておくのも、インドを考える上で役にたつかも知れない。
★デリー、ベナレス、アグラ、ジャイプール、オーランガバード、エローラ、アジャンタ、ボンベイ(この年はまだムンバイに改名されていなかった)

その行程の感想を以下のように残している。

「デリーの朝のひとつき、見るもの皆珍しいインドの人達の動き。ベナレスで最初の冒険としてリキシヤで夜の街を回ったこと。ガンガーの日の出のころの沐浴見物。サールナートの静寂。タージ・マハルの優雅なたたずまい。ジャイプールの宮殿ホテルとホテル前庭での結婚式。アンベール城の威容。エローラのカイラーサナーター寺院とアジャンタの石窟群。アジャンタ石窟全景の遠望やデカン高原の大地。ボンベイのマリーンドライブを走り、インド門や沈黙の塔等々。これらはインド旅行で目立った印象だが、何を見てもすべてが驚きであり収穫であった。とにかくどこに行っても、いまインドにいるという実感を旅の間中、持ち続けた。インドにおける子どもの目が生き生きしていたのにも驚きだった。」

ぶっつけ本番のインド

ものごとが終わってからは執拗に追求する私だが、ことを起こすまでの準備というのは至っておろそかな人間である。渡印までにインドの地図上で意識していた地名は、デリー、ボンベイ、カルカッタ、マドラスくらいか。それに珍しく、コモリン岬は記憶に残る地名だった。アグラもベナレスもジャイプールも、全くツアー案内書に見るだけの土地だった。

インドはヒンドゥ教の国とは理解していたが、お釈迦さんの国だから仏教も盛んだらうと思いきや。このことはインドに関心を示さない人達と同様のレベルであった。インドの仏教は鎌倉時代には既に消滅して、いま残されているのは仏跡であるということを知るといっておそまつさ。

しかし、インドの地をこの足で踏み、この目で見られる範囲を見てきたという一連のことは、私にとっては隔世の出来ごとだった。広い大地と、そこに暮らす人々。古代の遺跡も中世の建造物も現代の町並みも、一緒くたに存在する不思議な世界に私は言葉を失った。あまり使いたくない言葉だが、事実「悠久の」とか「多様性」とかいう語彙でないと表現できないものの存在を肌を感じる旅となった。

そして、とても自分の思考回路では処理しきれないこれらの事象に対して、その解明の一端でも得られるかとも思いついたことがある。それは、私以外の人達はこの得体の知れないインドをどのように感じているだろうか、それを見ることによってインド理解の鏡にしたいとも思った。かくして、私の執拗なインド本探索が始まり、以後20年近く続くことになる。

インド民芸館の延原啓さんとの出会い

すべてあきらめのよいタイプと思う私の性格だが、一面粘液質の部分もあることは、インド本を探すという熱の入れようで明らかになる。インド本の収集の話の前に書き落とすことの出来ないのは、一人のインド狂なる人物との出会いである。この人との接触がなかったら、私のインド熱も発散の場を求めることが出来ず、いつしか萎んでしまったかと思う。その後、多くのインド体験者に会う機会はあったが、北区上十条に私費で「インド民芸館」を建て、自分のコレクションを公開展示した延原啓さんを超える人は知らない。

延原さんは私より1年先輩の大正10(1921)年の生まれか。小学校の社会科の教師であったと聞かすが、生涯に50回もインドに行ったと。その都度持ち帰った膨大な民芸品のコレクションを納め展示するために、自宅敷地に木造2階建ての「インド民芸館」を建てたと。都教員の退職者対象に出している「福利広報」のコーナーで、このインド博物館の記事を見た。最初のインド行きで、身体全体がインドの熱でまだほてっているときだった。

1994年10月に初めて北区のインド民芸館を訪ね、多くの目が開かれる思いだった。延原さんの収集した民芸品は、初めて目にするものがほとんどだったが、インドにぞっこん打ち込んでいる人の話には打たれるものが多く、以後のインドの関わりは延原さんなしには進まなかった。ここで更に一つの発見をする。それは『キターブ』というインド本のリスト集だった。この手づくりの本は「インドの魅力を発掘する会」の編集で、編集責任者は房州に住む今西創一郎

という人だった。私がインド民芸館で得たのはその初版で、1983年から編集にかかり初版には660点のインド本が収録されていた(2003年に改定された8版には3255点の記録がある)。

再びのインド ラジャスタン紀行

求めよ、さらば開かれん。という言葉があるように、日々日常生活をしながらも、インドについてのアンテナは常に張っていた。その一つとして、『キターブ』に記載されている初期のころのインド本を探すことを自分に課していた。そのために、古本屋を見つけると必ず首をつっこみ、古書市開催の情報を得ると万里の道?を遠しとせず、都内はもちろん横浜までへも出かけた。これらの本は、古本としてのみ存在したからである。

一方、インド情報の多くは先達の延原さんから得ていたが、一緒にインド行きをプラン化しようという話が出て、それが形となったのは1996年11月だった。構想は延原さんが立て、小さな旅行社ジャンボリーツァーズの坂本徹さんが具体化し、私が入ることにした。

私にとっての2度目のインド行きは、初回のインド行きから4年近くたった1996年11月にやってきた。『インド民芸館長延原啓先生と行く ラジャスタン民芸品紀行』という触れ出しで、私の知人で構成した7名の一行となった。ラジャスタンという土地は砂漠に直結する地名と思ったが、写真にあるようなあの砂漠を見る機会はなかった。

★デリー、マトゥラ、アグラ、ファティプル・スィークリー、ジャイプール、ジョドプール、ピカネール、マンダワ、デリーを回る11日間の旅だった。このコースは、その後の南インド行き、4度目の東インドの旅に較べて多彩ではなかったが、インドの何かを知るには十分すぎる経験となった。

私は最初のプランが示されたとき、そのコースに添って自分なりの予備資料を用意したのだったが、それを活用することは全く出来なかった。

ラジャスタンはヒンドゥ王国の繋がりの方

な地域であるが、隔絶したそれぞれの都市に豪華な城塞があり、いまはその多くが博物館やホテルなどになっていた。ジャイプールのアンベール城、ジョドプールのメヘランガール城、ビカネールのジェナーガル城などは、豪華な王朝絵巻を見る思いだった。日本の城があまりにも素朴で比較のしようがなかった。

遙か先にタージマハルを望むアグラ城、僅か14年しか使用されなくて、いまは遺跡として残るファティプル・スィークリーの城跡も印象に残った。ハベリという言葉はご存じないかも知れないが、カルカッタの豪商達がタール砂漠を越えて西方との交易をするため、その通路にあたるこの地に建てた別荘をいうと聞いた。その壁面のフラスコ画が往時を偲ばせていた。

マトウライの博物館に残る初期仏像群、ジャイプール郊外サンガネールにある延原さんの知人宅の夕食会招待。ジョドプールの王宮ホテルの豪華さ（泊まったホテルは別）、カルマータテンブルという鼠寺、ビカネールの街中での結婚式場に飛び入り参列、マンダワの市街と深井戸。デリーでのクトゥブミナール・デリー城、オールドデリーの喧噪の街中をリキシャ（人力車）で通り抜けたことも、一つのインド体験となった。

私はこの旅行のあと12ページに亘る細字の行程記録を作り、同行の仲間へ届けた。いまここで細部の地名を記録できるのも、その資料を残したことによる。

インドの変貌

インドがそれまでの政策を変更し、国を開放して経済的に外資を受け容れることになったのは1991年とさく。それまでは国内産業の育成という建前で、タクシーなども画一的なアンバサダー一色だった。私が訪れた1993年でも、都市の道路工事にサリーを着た女性労働者が土を入れたザルを頭の上に乗せて運んでいるのを見た。まだIT産業の兆しも見えていなかった。

ところが3度目のインド行きのころは、長年インドに通っていたインド通の延原さんも「インドは変わってきた」と何度か口にするように



インドの主要都市 (http://indiaing.zening.info/map/ より)

なった。1970年代からインドに渡り、長い期間滞在し、体験的インド事情を『インドの大道商人』等で紹介した山田和さんも、上記の本の文庫本を出す時、この10年間にインドは様変わりをしたと書いていた。最初にインドに渡ったころは、子どもに「将来何になる？」と聞くと、「親の仕事を継ぐ」といっていた。それがいまでは「プログラマーになる」と答えるようになった。

とはいっても、一介の旅行者にとっては、その変わりようなど細かに見分けることなどできるわけでもない。別の角度から聞きかじりのことを書くとすれば、インドにはいくつかのジネクスがあるようだ。インドを一度旅した者はその評価が2つに分かれると。再度、三度インドを訪れるようになるタイプと、インドの猥雑さに辟易となり、もうインドは懲り懲りだという類とに分かれると。

もう一つ、インドが自分(人)を呼んでくれるとも。インドに招かれる選ばれた人と、それ以外の人とも分かれると。これも流布している言い伝えだろう。私はいくつかの本でこの事例を見た覚えがある。そのような神秘さがインドにはある。そして、70歳にして初めてインドに呼び寄せられたと自分なりの解釈を持つようになった。

ドラヴィダ文化の地を走る—3度目のインド—

ラジャスタンの半砂漠地帯を回った1996年から3年の時間を経て、3度目のインド行きのチャンスが巡ってきた。この時のメンバーは、小金井市の公民館東分館の利用者を中心にその殆どが小金井在住者であった。その前に延原さんを紹介したこともあって、小金井市の東分館主催でインドの仏跡巡礼のツアーを組んだことがあった。何らかの事情で私は参加しなかったが、その後の南インドの旅はこれらの人たちが多く加わった。

「延原啓先生と行く 南インドの遺跡とドラヴィダ文化の旅」という触れ出しで、1999年12月延べ13日間の旅となった。同行は延原さんの近くの石賀美雪さんを加えて14名。

★ムンバイ、チェンナイ、カンチープラム、マハーバリプラム、ポンデシェリー、チタンプラム、タンジャプール、チェルチラパッリ、マドゥライ、ラーメシュワラム、マドゥライ、カニヤクマリ、トリヴバンドラム、(バックウォーター)、アレッピー、コーチン、ムンバイ。

アーリヤとドラヴィダというのは、対比して考えられることのように思っていた。前2回のインド旅は北インド、主としてアーリア系の文化を見てきたこともあって、ドラヴィダ文化は意識の外だった。今回の南インドの旅で改めて目を開かせるものがあり、この旅に加わったことで、インドの文化の本質を見る思いもあった。

チェンナイ(マドラス)において私が先ず印象に残ったのは、マリンビーチと呼ばれる途方もなく広がる砂浜で、見慣れた日本の砂丘にくらべその広大な拡がりに目を見張った。南インドは驚きの連続だったが、それを書きあげるスペースはないのでメモ書きで残したい。

- ・チェンナイ郊外のカンチープラム、マハーバリプラムの寺院群
- ・マハーバリプラムのクリシュナのバターボール
- ・タンジャプールのプリハディシュワラ寺院
- ・マドゥライのミーナークシ・スンダシュワラ寺院
- ・ラーメシュワラムのラーマナータスワミー寺院と沐浴

- ・コモリン岬のサンセット
- ・カニヤクマリの沖のヴェーカーナンドロック
- ・ケーララ州のバックウォーター
- ・コーチンのチャイニーズ・フィッシング・ネット
- ・ムンバイのタージマハルホテルとエレファン島

カタカナ書き地名、寺院名はうろ覚えなので、きちんと表記できたかおぼつかない。インドに関係のうすい人には、ただ煩瑣な固有名詞の羅列に過ぎないがお赦しを得たい。

南インドの思いのいくつか

前記南インドの地名はほとんどが初めて聞くもので、とても覚えきれるものではない。ただ走り過ぎたにすぎない異国の地だったが、そこに展開する初見聞の風物は私の生涯の旅の中でもことさら印象的な土地であった。

この2年後の東インドの旅を加えても、南インドは特別の地であった。その一つはドラヴィダ文化といわれる石づくりの建造物で、それらのほとんどはヒンドゥの寺院であった。歴史的遺物になったものもあったが、その大部分はいま生きている人たちとの関わりの中に存在していた。マドゥライのミーナークシ寺院などはその最たるものだった。スリランカに近いラーメシュワラム島に向かって伸びているのは橋だか砂洲だかわからないが、道路と鉄道がこの伝説の島につながり、この海岸で初めてインド洋に身体を清めた。その島にある石造りの宏大な寺院には21個だかの井戸があり、求めれば沐浴できるとあったが、その冒険をしておけばよかったと後で後悔した。

インド最南端のコモリン岬は是非とも一度立ちたいところだった。アラビア海とベンガル湾とインド洋が集まり、そして分かれるところである。そこへは夕陽の沈む時間に達したが、沖合は雲がかっていた。

インドの自然の雄大さに驚いた一つは、最南端カニヤクマリの目と鼻の先の海中に一つの島があって、通いの舟が人々を渡していたことである。そこには神殿(寺院)が建てられ、そこ

へ詣でる人たちで混雑していた。そこはインドの宗教家だか哲学者のヴェーカーナンダが修行した地として、島の名がついたという。そして、驚くことに何百人も上陸できるこの島が一枚岩の岩礁ということだった。

思いに残る印象は限りなくあるが、いま一つだけあげるなら、バックウォーターといわれる水郷地帯である。アラビア海にほど近いケララ州の内陸の船着き場から船に乗った。この先何が展開するか私は予備知識が何もなかった。船は川だか運河だか尽きることのない水路をかなりの時間かけて走ったが、岸辺の向こうは水田が広がっていた。後でこれが有名なバックウォーターということを知った。後日、民放で緒形拳が主人公の『印度漂流』という番組を見たが、それにはラーメシウラムの沐浴も、このバックウォーターでの生活も映っていて懐かしい思いで見ることが出来た。

インド本探索

「開運 お宝何でも鑑定団」という番組がかれこれ20年くらいは続いているので、ご覧になった方は多いと思う。番組に出品するのは1点でも、その奥に何百点、何千点というコレクションが隠れていることを垣間見る。私には骨董趣味はないが、何かを集めたいという習癖はいまも残っているようだ。ひと頃は出版物のカタログを集めたことがあった。出版不況の時代がきて、全集・叢書の出版が停滞してから私の役割も終わった。

それに代わるものとして「インド本」を集めるハメになった。それは1993年に初めてインドの地を回り、予備知識の乏しかった私はただただ驚愕するだけで、インドについて正確な評価などもまともに出来ることではなかった。旅から帰って、あれは何だったかを確認できないまま、私以外の人はインドをどのように見ているかが気になってきた。そして、インドについて書かれた本を探す旅が始まった。それぞれの分野から10冊も求めればアウトラインは掴めるだろうが、それでは飽きたらず、街にできれば古本屋（インド本の大多数は古本として流通し

ている）を覗き、古書市の情報を得ればかなり遠くまでも出かけることを厭わなかった。

求めてきたインド本はワープロ上に記載欄を作り、求めたその日に記録することにしたので、『インド世界とインド本世界（インドへ行った人々の記録）』がある区切りをもつ2006年までに1017冊の一覧が記録として残った。

インドの未知なることを深く研究するより、インド本を探すことが目的になったことも隠さないほうがよいだろう。珍しい記録を残している。1998（平成10）年の年間記録の「インド本探索」の古書市の記録である。

01/14 小田急古書市
02/03 高田馬場古書感謝市
03/11 彩の国古本まつり
04/21 中野サンプラザ古本市
06/03 高田馬場古書感謝市
06/18 彩の国古本まつり
08/03 京王古本市
08/05 高田馬場古書感謝市
08/12 小田急古書市
08/13 伊勢丹大古本市
08/29 東横古書市
09/09 彩の国古本まつり
10/02 早稲田青空古本市
11/08 彩の国古本まつり
12/03 高田馬場古書感謝市
12/14 伊勢丹大古本市

※この記録はたまたま残っていたから記載できるが、この前後は毎年この程度の古本市に足を運び、その何倍かは街中の古本屋を覗いたものだった。

このころ競うようにして開かれたデパートの古本市はいつしか沈静化し、いまは京王デパートが年末に開いているだけである。現在、デパートの何倍かの規模で開催されるようになった古本市は、所沢の「彩の国古本まつり」で年に4回定期的に開かれ、私は数年前までは欠かさず通い、私を待っていてくれるインド本と対面するのを楽しみとしていた。

シャンチニケートン 東インドの民芸を求めての旅

シャンチニケートンという地名は知る人ぞ知る、カルカッタのある西ベンガル州の田舎の町である。私はタゴールが作った大学の所在地として理解する前に、この地が印象づけられたのは、タゴール暎子の『嫁してインドに生きる』という著作による。その後いろいろな関わりで、この地と深い繋がりのある人を何人も知ることになった。

そのシャンチニケートンにも回るというツアーが延原さんによって企画され、私は例によって参加者を募った。旅は「延原啓先生と行く デリーのクラフトメラと西ベンガル・オリッサ州の民芸の村を訪ねる旅」というのが触れ出しであった。期日は前回の南インドの旅の後、1年と少したった2001年2月。足かけ13日間の旅で世話役の坂本さんを加えて10名の一行。

★デリー、カルカッタ、シャンチニケートン、ビハール州マルティ村、ビシュヌプール、カルカッタ、ブバネシュワル、コナーラク、プリー、ブバネシュワル、デリーの行程。

今回の旅の目玉は初めての東インドの各地を回ることに、旅の目的が民芸品の製作現場を訪ねようという主旨だった。延原さんの知人で現地人のレイさんがスケジュールを立て、民芸品の村の訪問のほか、夜間は毎夜のようにインド特有のダンスを見物する機会を得たのだった。たとえばビシュヌプールのチョウダンスなどは、この機会でないとは見ることは先ずない。

デリーに着いた翌日と翌々日の2日間は、デリー郊外のスラジクンド公園で開かれる「クラフトメラ」を見物する日程になっていた。それは野外における民芸品の大会であった。ここで求めたラジャスタンの壁かけは、ずっと我が家の居間にかかっている。

4日目。3時起きをして、国内線でカルカッタに向かう。とにかくインドのインドたることを象徴する街カルカッタの地が踏めるとあらばと、多くの期待をもってこの地に向かった。フライトの時間は1時間30分。8時過ぎにはもうカルカッタ空港に着いた。茫洋、混沌と言われ

るカルカッタの街から、空港はかなり離れたところにあった。

後に昔の名前コルカタに名称を変えたが、私にはカルカッタについての予備知識はかなりあった。さきにあげた『嫁してインドに生きる』にしても、『歓喜の街カルカッタ』にしても、タゴールや岡倉天心にしても、またマザー・テレサの活動にしても、みなカルカッタが舞台で、デリーやボンベイではない。

ここまで書き進み思い出したことがある。最初のインド行きの翌年の1994年9月、私は幻とも言える1本の映画を観た。それは『ガンガ 俵万智イン・カルカッタ』というドキュメンタリーであった。大森キネカという小さな上映館だったが、そのことでなおカルカッタの印象を深めることになった。映画『ガンガ』はその後各地に上映されるでもなく、またテレビに放映されることもなく、静かに眠っている感じだが、私の気持ちの中にはいまなお生きている。それは後日、俵万智が「ある日、カルカッタ—人生の原点を見つめるインド紀行—」という文章で、このときのロケの経緯を詳しく述べていることにもよるのだが…。

『サラダ記念日』で爆発的な登場をして何年もたたないこの日、私は彼女のPR資料のコレクションを見せて、この「時の人」と二、三話をした。彼女は、私のコレクションに日付けとサインをしてくれた。その後この人の紆余曲折は、外から聞こえるのを耳にするだけである。カルカッタを舞台にした頃20代だった彼女は、いま石垣島で子育てをしていると。

旅の話に戻す。カルカッタでは、日程上多くの事象を見ることが出来ず、花市場とか泥人形を造る街を訪ねたのがせめてもの収穫だった。『歓喜の街カルカッタ』のテーマとなった人がひくりキシャ（人力車）はもう無くなったと聞いていたが、まだそれも残っているを見た。

翌日はバスを仕立ててシャンチニケートンに向かう。8時にカルカッタを出て、シャンチニケートンで牧野財士先生の出迎えを受けたのは2時だった。牧野先生は在印40年というキャリアがあり、シャンチニケートンにある国立大学

(通称タゴール大学)の日本語の教授と聞いた。マニプリダンスを専攻している一人娘のセツさんは、後日オリッサの旅にも同行してくれた。

民芸品を求めて私たちが回った各地は、西ベンガル州と隣のビハール州の農村地帯で、どこにも赤い大地が広がっていた。豊かさを感じることはなかったが、人間が生きる素朴さというもの強く感じる旅となった。

オリッサ州のヒンドウの寺院

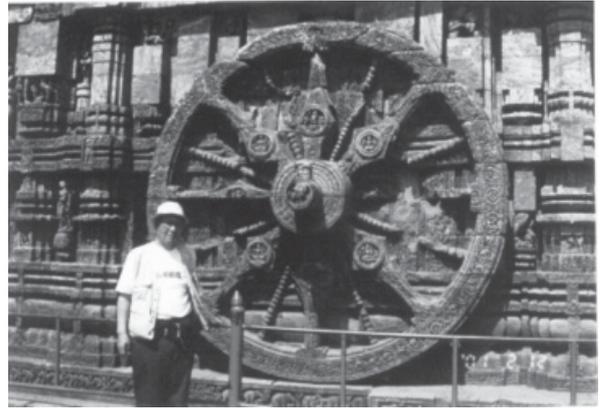
当初、カルカッタから列車でオリッサ州に入る予定だったが、急遽変更して空路となる。フライト時間は1時間。州都ブバネシュワルには7時ころ到着。この周辺にはかつては何千という寺院があったと聞かすが、イスラムの侵攻で衰退したという。それでもかなりのヒンドウ寺院が残り、それは遺跡に近い寺院と現在の信仰対象の寺院とに分かれていることを知った。

オリッサで有名なのは太陽寺院といわれるスーリヤ寺院のあるコナーラクと、ジャガンナート寺院のあるプリーである。石の車輪で有名なコナーラクの寺は、いまは観光の遺跡となり、プリーの寺は盛大に現世利益の寺院となって人々の生活と密着しているようだ。ただ多くのヒンドウ寺院と同様、この信仰の寺にはヒンドウ教徒以外は立ち入ることが出来ないと。ジャンガナート寺院の祭りのすさまじさはテレビでも視ていた。それはとうてい日本の祭りの比ではない。

海外旅行の経験の乏しい私だが、インド本を読んでいる中で、親しく思える地名がいくつかあった。その一つがプリーである。ここは先にあげたヒンドウの寺院の存在とヒッピーの休息地の一つだと。いそがしい旅人にはヒッピーも寺院にも直接触れることなど出来なかったが、それでもここで求めたジャガン神と兄のバララマ神、妹のスバドラー神の素朴な面が我が家の居間のなげしにあって、私の日々の生活を見下ろしてくれている。

インドに関わる記録のあれこれ

インドの旅に限ったことはないが、何かにつ



上：コナーラク(オリッサ州)の太陽寺院の壁。

中：ビハール州のミティラの絵を見る。

下：ビハール州テラコッタ寺院の村で子どもたちと。

けて記録を残す習慣は、いつのころからか私についてしまった。ワープロの時代は比較的簡単に文章が活字化されたので、15～20ページ程度の手作りの冊子を100冊くらいは作ったろうか。いずれも原稿料の対価となるような内容ではなかったが。

インド旅の場合も同様で、かれこれ30種くらいの資料集を編んだ。なかでも自分で満足し

ているのは1996年から記録を始めて、2006年でキリをつけたインド本目録『インドへ行った人々』で、92ページの冊子に1017冊の詳細目録が残った。これを残していたので、後日インド本を委託する際に大いに役立った。目録を繰ってみると、どの本をどの古書市で求めたかがわかり、その時の状況を昨日のこのように思い浮かべることが出来るのである。

4度にわたるインド旅も、その都度旅のあと時間をかけてその行程を詳細な記録に残した。最後の「西ベンガル州とオリッサ州の旅」の場合は24ページの冊子として同行者に配ったものだが、2月15日に旅を終えて記録集が完了したのは5月に入っていた。しかし、この資料が残ったことで、15年の時間を経過しても往時を眼前に想起することが出来るというものである。この記録を見て少し滑稽に感じるのは、移動についての詳細な時刻の記録を残していることである。万事おおまかなインドの時間の流れのなかに、分単位の記録が何の意味をもつかとも言えるが、ちまちました生活を過ごす日本人の私にはこの移動時間は生活感覚の上で必要欠くべからざるものだったようだ。しかし、あのように感激したインド旅の感想文集の少ないのは、日程表の中にその思いをこめたが故かも知れない。

もう一つ、いまでは到底出来そうもない記録が残っている。それは1993年の初インド行きの後、インド本収集に熱をあげたことを書いたもので、3年後の1996年にまとめている。そのタイトルは『いつのころ誰がインドへ行ったか』という率直単純なものである。この年までに求めた250冊のインド本を点検して、誰がいつどのような目的でインドに行き、その記録を残したかを時代ごとに分かるようにした表である。

戦前のインドに足をいれた人については、その後求めた本も含めて10人くらいの記録が私の手許に残ったが、戦後渡印した先駆者は東大の荒松雄氏であった。ペナレス大学の留学生として1952年に渡り、さらにデリーでの2年間の生活があり、インドを伝えるには格段の功績のあった人であった。その後、時代を区切っ

て1996年まで90人くらいのインド経歴が残っている。

このほか、後日ささやかな活動となる「インドに親しむひとときの会」のためにいくつものインド関係資料を作ったのだった。

インドに親しむひとときの会

1971(昭和46)年に始まった小金井史談会に入会したのは1992年であった。この会の主たる活動は月毎の史跡の見学会だったが、年に1回、個人の研究発表の機会もあった。2001年に私の番になり、断って「インドに親しむひとときを」というタイトルで2時間くらいインド行きの話をした。このころ4度目の旅を終えて、インドに熱中しているころだった。話の内容はきちんと覚えていないが、話題提供した自分が一番物足りないものを感じたのだった。

そのあと、いまま少しインドのことを伝えたいという気持ちが強まり、「インドに親しむひとときの会」を企画して参加者を募ることにした。小金井史談会の会員を中心に30名ほどの同調者があって、2001年9月17日に第1回の会合を東展示場で開いたが、メンバーで一度でもインドの土を踏んだ人は極くごく限られていた。

記録の中に「一資料の用意と問題提起は私の方で行い、時期が熟してくればしかるべき有識者(インド体験者)の話聞くようにしたい」と書き残している。この頃はまだ80歳前だったのでいくらかのエネルギーは残っており、隔月の会合には事前資料なども精力的に作ったものだった。しかし、私のインド体験など全く表面的なもので、早いうちに多くの先駆者の援助を受けるようになるが、私のアンテナにかかる人は限られていた。この会でインドの体験事情を伝えてもらった人の名を記録に残しておきたい。前記、インド民芸館の延原啓さん始め、坂本徹、伊藤顕允、鹿子木謙吉、木俣美樹男、分部庸子、岩本光司、川浪富士夫の皆さんなどにそれぞれのインド体験を披露していただいた。

いずれにしても薄謝も出せない集まりであったが、インドについての思いの深さで我々を啓蒙してもらった。この会は16年たったいまも

隔月で続いているが、「インド」を媒体とするといっても親睦の会の傾向が強くなっていることは、時の趨勢として素直に受け容れるべきだと考えるようになった。

インド本の落ち着き先

世に問うコレクターの蒐集品に較べるなら、私がちまちま集めたインド関係本（インド本）など、それほど価値のあるものと自負する気持ちなどさらさらしない。ただ、この程度の本でも一端散逸したら再度集めることは至難なことと思われるので、これを一括して受け容れてもらう所があれば委託したいと常々考えていて、折を見ては受け容れ先の打診をしていたところであった。

数年前、東京学芸大学の図書館へとの斡旋もあり、全冊のリストを作ってもらったところまでいったが、諸般の事情で受け容れ不可となり振り出しに戻るようになった。そんなところ、木俣美樹男先生の「植物と人々の博物館」から引き取ってもよいとの申し出を受け、それを有難くお受けすることにした。

2013年3月、その大部分を送り出すとき、せめても私のもとにひとときでも縁のあった証として【インドに親しむひとときの会 小金井】のスタンプを押して送り出した。これらのインド本は私の手許を離れたのだから、この先のことは新しい管理者に任せることは当然なことだが、これらの本がそれぞれにこの世に出たという使命がこれら後生かされることを願うのみである。

西川至氏の略歴

愛媛県東宇和郡（現西予市）にて、大正11年7月生まれ。昭和17年、愛媛県立青年学校教員養成所入所、昭和20年5月 陸軍重砲兵部隊二等兵、敗戦除隊後、同年9月に愛媛青年師範学校卒業、10月に愛媛県高山青年学校教諭、昭和28年 東京都東村山化成小学校教諭などを経て、昭和58年 府中市立四谷小学校長で退職。

以後、育てる会編集委員など歴任、また、「書肆にしかわ」として自分史の編集アドバイザーを務めた。平成13年からインドに親しむひとときの会主宰。